



# でらボラNAGOYA通信

2016年 6月号

真宗大谷派名古屋教区内有志災害ボランティアネットワーク 発行

熊本地震から2ヶ月。でらボラメンバーも続々と現地入りし、支援活動にあたっている。東北での支援活動経験が生きていると実感することもある。まったく改善されていない もどかしさに 唇をかむこともある。

東北と九州。名古屋の地から北へ南へと奔走しながら「支援するとは何か」という問いは いつも私たちの心に立ちはだかつて消えることがない。

でらボラメンバーが、でらボラとの出会い、活動内容、今後の展望をご紹介します。  
第1回目は、でらボラ生みの親でもある石川県七尾市浄願寺住職の竹原了珠氏です。

震災当時は、ドロ出しや炊き出し、救援物資が活動の中心でした。あの時は、だれもが支援の方向が具体的に見えていました。でも、今や帰還や移転、経済復興が中心問題のように取り上げられていて、私なんかはどう支援したらいいか見えなくなります。

一方で、震災を知らない、悲しみに触れることができなかつた人がどんどん増えていることにびっくりします。当時、世の中の様子を知らない1～2歳の子は小学生になって、お話や教材があれば震災の痛みが想像できるような年になりました。それから、東北へ行って支援できなかつた小学生や中学生は、今や多少の助けがあれば東北へも行けるような歳になりました。まだまだ、やるべきことがあるように思います。

また、震災は、多くの辛さを与えただけじゃなくて、人間らしく生きることを奪う日本の現実を暴きました。こんなことは、震災5年を経験した私たちが、一番よく気づいているはず。だからこそ、私たちしかできないことがあるように思います。

震災から5年。

未来の人類に捧げられるように、地道に、あきらめることなく、はじめる。



竹原了珠(震災時40歳)

私たちは、2011年3月11日に発生した東日本大震災を機に、被災地の復興と、人と人とのつながりの回復を願う有志によって結成されたネットワークです。

活動支援のカンパなど、引き続き本会の活動へのご支援、宜しく願い申し上げます。

募金は「一如さん(毎月12日)」の募金箱、もしくは下記の口座までお振込みください。

【口座名義】真宗大谷派名古屋教区内有志災害ボランティアネットワーク

【ゆうちょ銀行振替口座 口座記号番号】00800-8-174946 【支店名】名古屋橋



5月の募金額は **82,402**円でした。たくさんのご協力をありがとうございました！

# 熊本地震復興支援現地視察活動報告

(2016年5月22日～24日)

参加者：竜沢悟・勝間靖・八反田雄一郎・加藤浄恵・祖父江志郎

大津町では、被災した真宗大谷派寺院「光行寺」を訪れましたが、本堂の土台はずれ、正面の階段にある柱は突き上げあれて、本堂本体とをつなぐ部分の臍が外れており、被害は甚大。本堂内もまわりの壁枠はずれ、入口上部の明り取りの窓も崩落。すでに須弥壇などは外されており、本堂としての機能は失われている状態。住職のお母様が「これからどのようにしていったら良いのか見当がつかない」と涙ながらに悲しみと不安を語られました。



立野地区民間ボランティア「南阿蘇よみがえり」では、「集落が点在しており、年配の割合が多く、住居の片付けなどに困難を抱えている。現在も水道の復旧がなされていない。都市部と違い人手がなかなか集まらない」と伺いました。

立野地区を出て内牧温泉地区へ移動し、阿蘇・山田の真宗大谷派僧侶・湯浅信順氏と面会。でらボラ NAGOYA の支援に対して、感謝の言葉をいただきました。

さらに益城町津森へと移動。津森神宮の山の上に学校とグラウンドがあり、現在グラウンドの空き地に仮設住宅が急ピッチで建設されていました。

津森から福原の大谷派寺院・皆乗寺へ。こちらも被害は甚大。本堂への階段上の屋根は垂れ下がり、正面からは破風が見えなくなっていました。突き上げが激しかったようで、正面の柱は二本とも土台から外れ、柱を渡す梁も破損し、猿鼻は外れて破魔縁に転がっていました。

最後に福原から益城町市街地へ。市街地は建物が密集していることもあり、壊滅に近い状態。一見、無事に建っているように見える家屋も入口には【立ち入り禁止】の赤い紙か、【要注意】の黄色の紙が貼られており、家財道具などの持ち出しの困難さが容易に想像できました。とはいえ、熊本市内から近い事もあって、ボランティアなどの支援活動をする人々の数も多く、南阿蘇の各地とは復興支援に明らかな違いが見て取れました。

現地支援視察を終え思うことは、刻一刻と変わり続ける状況に対し出来る限りの確に対応するために、継続的に情報を収集し、確認を繰り返すこと。また、それを可能にするための、情報を基に広がって行くネットワークと、活動をマネジメントする体系の構築が必要だということです。そこには当然、人的関係と相互の信頼関係も必要となります。



また、「支援をする側」が「寄り添う」という思いで行うことが、必ずしも支援を受ける側（受けざるを得ない側）にとって「寄り添っている」ことにならない場合が少なからずあるのではないかとするのは、ずっと抱き続けている疑問です。炊き出しの献立にしても、提供されたメニューがアレルギーや体調、または宗教的理由で受け容れられない場合があるでしょう。そこで無理強いしてしまう、断りにくい雰囲気を作り出してしまっていないだろうか。

支援活動が「寄り添う」と言いながら、相手の本来歩んでいた道の幅を狭める「幅寄せ」になってしまう様、活動内容の絶え間ない検討の必要性を強く感じています。

報告者・祖父江志郎